

Distortional Lovelive!

アカトーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

たとえ一瞬の輝きだとしても、それさえあればいい
それはきつと、彼女たちも……

偶然の出会いから始まった、たった1年の少年少女たちの軌跡

目次

1st Phrase: Before The Dawn	1
Ex Phrase: 星に願いを	8
Ex Phrase: When You Wish Upon Th	19
e Star	
2nd Phrase: Wake For Young Souls	34

l s t P h r a s e : B e f o r e T h e D a
w n

雪が降っている。もう3月になったとはいえ、この地方では珍しいことではない。名残り雪、とも言えるだろう。ぼんやりとプラットホームで新幹線を待ちながらそう考えた。

「名残り雪、だな」

今まさに自分が考えていたのと同じことを隣に立つ陽介が呟く。それはきつと、俺に、そしてなにより彼自身に言い聞かせているのだろう。ああ、とだけ返す。それ以上何も言えなかった。言ってしまったら、いつの間にか足元に降り積もった見えない雪に足を取られてしまいそうだったから。

彼もそれから口を開かない。新幹線が来るまであと7分ほど。このまま何も言わずに立ち去るのがきつとお互いにとってベストな選択だろう。でも、時として人はそれを知っていながら、別な道を選んでしまう。最善の道を捨て、遠回りや険しい道を選択する。すべての人がそうではないだろうけど、少なくとも俺たちはそうやって、いつも最善の道に唾を吐いて進んできた。だから、きつと今も何も言わないなんてことはできない。

「本当に行つちまうんだな」

「……今更、やっぱりやめます、なんて言えるわけないだろ。それに言う気もねーよ」

「でも、バンドはどうするんだよ？ お前が作ったバンドじゃないか……」

やはりこの話に行きついてしまう。陽介と、そしてアイツらと組んだバンド。だけど、それはもう過去の話だ。そんなでかい荷物は持つていけない。ここに置いていく、そう決めた。

ポケットから煙草を取り出す。口にくわえて、火を灯す。最初は肺まで煙を入れず、口の中でふかすだけ。そう教わった。

「悪い。こんな解散みたいな感じにしちまって」

「それをアイツらにも言ってみてやれ。アイツらはその一言が欲しいだけなんだから」

「分かってる」

今度は肺まで煙を入れる。そして大きく息を吐いた。息が白い。寒さのせいかな、それとも煙草の煙なのかまでは見分けがつかなかった。

「分かってはいるけど、言えないんだ」

言わなければいけない。でも、それを口に出したくはなかった。何故だろうか？自分でもよくわからない。何か引掛かかって、邪魔をして、言えなくなってしまう。その理由がわからない。

「そっぴゃお前、荷物はそれだけで大丈夫なのかよ？」

唐突に話題を変える陽介。彼なりの気遣いというやつだろう。相変わらず口下手で、脈絡のない話をいきなり持ち出して来る。

「ん？ ……ああ。俺にはギターとタバコがあれば十分さ」

「お前、未成年だろうが」

「細かいことは気にするなよ。今日くらいだ、外で吸うのなんて」

大分灰がたまってきていたので、軽く揺らしてそれを落とす。風に乗って舞うその様は、すぐに雪と紛れて区別がつかない。

「それで、荷物のことだっけ？ 心配せずとも、もう全部送ってある」

「相変わらず、変なところで頭が回るやつだ」

「うるせ」

短くなった煙草をもみ消していると、新幹線がホームに滑り込んできた。入口が開く。数人が降りて行った後で、俺が乗り込む。すぐに立ち止まり、振り向いた。陽介はいつも通りのポーカー・フェイスだが、心なしかどこか悲しそうな表情に見えた。

「本当に行くんだな」

「何回目だよ、その台詞。もうとつくの昔に決めたんだ。それに、アツチに行けばあの人が見つかるかもしれない」

「お前、まだ……」

出発のアナウンスが流れる。もう数秒もせずドアも閉じるだろう。

「じゃあな」

そう告げるのと、ドアが閉まるのは同時だった。ゆっくりと加速していく新幹線。陽介はただこちらをホームで見つめているだけだった。遠ざかっていくその姿。その視線を完全に振り切ってしまった後も、しばらくそのまま佇んでいた。今生の別れでもあるまい。声には出さず呟いて、自分を納得させる。適当に空いている席を選んで座った。窓の外を眺めると、もう雪はやんでいて雲の切れ間からは太陽が差し込んでいた。本当に名残り雪だったのかもしれない。俺が降らせたのかそれともアイツらか……。きつと俺の方だろう。いつだって俺からアイツらへの一方通行だった。今回のことだって、俺が一方的に言い切ってしまったことだから。ふと、時計を見る。降りる駅まではあと1時間くらいあった。少し眠ることにしよう。せめて、夢の中では……

それから、二回くらい電車を乗り換えて目的の駅に着いた。あとはここからこれから住むことになるマンションに行くだけだが、ここで問題が起きた。携帯の充電が切れてしまったのだ。一応、住所を書いている紙は持っているが、それだけで行けるとは到底思えなかった。駅員に聞くという手もあるが、何となくそれはやめ、適当に歩くことにした。最悪、近くのコンビニか交番に行けばいいだろう。そうして何十分か歩いていると、鳥居が目に入ってきた。折角なので、お参りでもしていこうか。そのついでに道を尋ねればいいだろう。そんなことをぼんやりと考えながら、石段を上っていく。どうやらこの神社は神田明神、という名前らしい。段数の多い石段を上りきると、思いの外立派な本殿が現れた。とりあえず、お参りをすることにした。財布を取り出そう、と思ったが、ポケットに入っていたのはタバコとライター、反対側には携帯しか入っていなかった。そういえば、送る用の荷物にまとめて入れてしまったかもしれない。仕方ない。背負っているギターケースからピックを1つ取り出し、それを賽銭箱に放り投げた。

「いらいら、いたずらはあかんよ」

そこを去ろうとすると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、そ

ここにいたのは巫女さんだった。年齢はそう変わらないようなので、家の手伝いかバイトだろう。

「すみません。財布を持っていなくて、代わりになるかなーと思って」「そういうことやったら、今回は大目に見てあげるわ」

「助かります。あと、ちよつと道を尋ねたいんですけど。ここの住所ってどう行けばいいんですか?」

「ええよ。……あれ、このマンション多分うちと同じところや。しかも隣の部屋」

え、と思わず驚きの声を上げていた。まさかそんな天文学的な偶然があるとは思っていなかった。それなら、と巫女さんは住所を書いた紙を俺に返しながらい言った。

「あとこの辺の掃除が終わったら、今日のバイトは終わりやからちよつと待っててもらってもええ?」

「大丈夫ですよ。じゃあ、その辺りで待っていますね」

ちよつと座れそうなところがあつたので、そこに腰かけていることにした。手持無沙汰だったので、ケースからギターを取り出す。挟めていたピックを取って、弦に滑らせる。チューニングは大丈夫そうだ。

そのまま適当にコードや、運指の練習を兼ねて色々なリフを弾く。ザツザツと竹ぼうきが石畳を掃く音とギターの音、時折風が木を揺らす音だけが響く。今日は3人編成。掃く音がベース代わりにリズムを取って、ギターと風がメロディー。次第に弾くりフはジャズ・ファンクよりのものに。足でリズムを取りながら、日本語と英語の入り混じった羅列を、即興のメロディーで歌う。意味なんて分からない、リズムだつてめちやくちやだ。でも、今だけの、この一瞬だけの感情を出す。段々熱量が大きくなっていくのが分かる。軽快な音から重い音へ。次第にパワーコードを多用していく。自分が好きなジャンル、そして何よりバンドでいつもやっていたジャンル。歌声も、ギターの音も大きくなっていく。もっと深く、もっとエモーショナルに。置いていくと決めた過去を全部振り切るんだ。ここからは別の道なんだ。激しいカッティングを織り交ぜていく。勢いを衰えさせることなく

掻き鳴らしていく。そして、ラストの音を鳴らし、自然に音が小さく
なっていくのを待つ。すると、パチパチと手を叩く音が聞こえてき
た。顔を上げると、先程の巫女さんが既に巫女服から学校の制服に着
替えて立っていた。

「すいません、お聞き苦しい演奏でした。行きましようか」

「いやいや、めっちゃ上手かったで！ 感動してもーた」

「……ありがとうございます」

これまでこんな風にストレートに褒められたことはなかったため、
少し照れてしまう。ギターをケースにしまい、再び背負う。俺の準備
を整ったことを確認して、巫女さんが歩き出す。

「待たせてしもうて申し訳ないなあ」

「いえ、此方こそ助かりました。えっと……」

「希や。東條希、よろしくな」

「松波巧実マツナミタクミです。よろしくお願いします、東條さん」

「巧実くんはどうして引越してきたん？ 親の都合？」

「まあ、簡単に言ってしまうえば俺の我儘です。東北の出身なんです、
どうしても地元の高校には進学したくなくて」

「ふーん、この辺に住むとなると明狼あたり？」

「ええ、その通りです。もしかして東條さんは明狼の方ですか？」

「ううん、うちは音ノ木坂学院。これでも生徒会副会長なんやで」

「へえ、巫女さんのバイトもこなしながらって凄いですね」

その後も色々話をしながらマンションへと向かっていった。東
條さんが通っている音ノ木坂学院というのは女子高らしいが、近年の
少子化や最近秋葉原にできたUTX学園というところに生徒を取ら
れているらしく、廃校に進みつつあるということだ。生徒会でも副会
長の東條さんと会長のえりちさん？という方とでどうにか廃校を阻
止できないかと色々案を考えているらしい。

「それは大変ですね」

「うちはそんなんでもないんやけど、えりちがなあ……。最近ちよつ
と張りつめ気味なんよ」

「まあ、あまりに根を詰めすぎてはいい考えも出てきませんから、

ちよつとはリラックスとか気を緩めてほしいですね」

「そうなんよー。全くえりちは……つてごめんな。いきなり愚痴ばかり言うて」

「気にしないでください。東條さんも板挟みみたいな状況で大変そうですし」

「ほんまおおきに。ところで巧実くんはバンドとか組んでないん？ さつきもめっちゃ上手やったし」

「…今は組んでいません。一先ずはこの辺りの楽器屋とかライブハウスに行つてギターを募集しているところを探そうと思います」

そう、俺はもうあのバンドのギターじゃないんだ。伝手も何もない、ただの流れ者のギター弾き。色々なバンドを渡り歩いて、もつと上手くなつて、新たに自分のバンドを作る。そう決めたんだ。

それからいくつか言葉を交わしながら歩いてみると、マンションに到着した。階段を上つて部屋の前までたどり着く。

「今日はありがとうございました。おかげで助かりました」

「ええよ、困つたときはお互い様。あ、そういえば夜ご飯はどうするん？」

「適当にコンビニとかで買つてすませよう、か、と……」

しまった。今は財布がなくて無一文の状態だった。荷物が届くのは明日、だから最低でも明日の昼くらいまでは何も食べられない。不思議そうな表情を浮かべていた東條さんだったが、直ぐその理由に気付きクスクスと笑いだした。

「しゃーないなあ。引つ越し祝いでご飯おごつたげるわ」

「そんな、大丈夫です。一食くらい食べなくても」

「だーめーや。いいからここは、先輩の言うことを聞いととき？」

「……ご馳走になります」

それから、机も何もない俺の部屋で宅配ピザやジュースなんかを一緒に食べた。一人暮らしにはかなりの出費だろう。本当に申し訳なかった。一通り全部食べ終わった後で、隣ではあるけれど、東條さんを見送ることにした。

「本当に今日は何から何までありがとうございました。この借りは必

「ず返します」

「気にしないでいいんよ。うちが勝手にやったことやから」

「とにかく今日はありがとうございました、東條さん」

軽く頭を下げる。すると、東條さんはうーんと顎に手を当てて考え込むようなそぶりを見せた。そして、何か思いついたらしく口を開いた。

「じゃあ、その東條さんて言うのやめてもらえへん？ 希って呼んで」

「分かりました、希さん。では、また」

「あともう1つ！」

「なんですか？」

「タバコはほどほどにな。未成年やろ？」

「……善処します」

それを聞いた希さんは満足そうに笑顔を浮かべ、自室へと消えていった。内心ではとても驚いていた。まさかバレていたとは。なんとなく不思議な人だ。掴みどころがない、っていう表現がぴったりの人だった。

思えば、これがすべての始まりだったのだろう。希さんと、そしてあの8人の少女たちとの。1年という短い期間を、有り体に言えば青春ってヤツを必死になって走り抜いた。

その始まり。

Ex Phrase : 星に願いを

ちりんちりん

何処からか鈴の音が聞こえる。初めて聞く音。でも、どこかで聞いたことがあるような……。音がした方向を向くとそこに誰かが立っている。顔はよく見えない。背は俺より少し小さいようだ。

「――」

「え？」

その誰かが何かを呟く。しかし、距離が遠いのか、それとも声が小さかったのか俺のほうまで届いては来なかった。聞こえる距離に行こうかと、相手の方へ歩き出すが一向に進まない。それどころか、遠ざかってさえいるようだ。

「…たしには、……いから」

「アンタ、何が言いたいんだ？」

どうにか追いつこうと走っている状態で、叫ぶように尋ねた。

「私には、似合わないから」

「！ おまえ……」

多少は距離が縮まったのか、相手の顔が見えた。よく見知った顔だ。いつもにやーにやーうるさくて、でもいつも誰よりも元気なあいつの顔。でも、その顔はいつもと違って暗く沈んでいる。何より、諦めの気持ちが強く出ていた。

声はつきりと聞こえた途端、一気に距離が遠ざかっていく。よくわからないが、とにかく放っておいてはいけけない。それだけは強く感じた。でも、どうやって？ 相手はもう諦めかけている。それなのに？ ……考えるまでもないか。

「勝手に、諦めてんじやねえ！」

そう言つて、俺はあいつの手をつかもうとして……

突如背中に衝撃が走った。目を開くところ数か月で見知った天井。

横にはベツド。

「なんだ、夢か」

声に出して確認する。今日は休日で珍しくどのバンドの練習も

入っていない。出来るだけ寝ていようと思っていたのだが、起きてしまったのではしょうがない。床から体を起こし、多少の身支度をすることにした。今日は散策がてら秋葉原へ出かけることにしよう。久しぶりにエフエクターでも作ろうか。何を作るかは店に行ってから考えればいい。空は厚い雲に覆われていて、あまり天気はよくないけれど、楽器を持つていくわけではないから雨が降ってもどうにかなるだろう。

偶にはこんな日も悪くない。

♪ ♪ ♪

「こいつ、男女のクセにスカートはいてきてるぜ」

「ほんとだ！ やーいやーい」

そう言つて、私の前を走り去っていく男子たち。やっぱり、私なんか……

「やっぱり、似合わないよね。着替えてくるよ」

思わず駆け出していた。気づいたら自分の部屋の姿見の前に立っていた。そこに映ってるのはスカートをはいている私の姿。勇気を試してみたんだけど、やっぱり……

そこで目が覚めた。目覚まし時計をとめて、起き上がる。今日は休日だけど、珍しく練習はお休み。だからかよちんを誘って遊びに行こうと思っただけけど、用事があつて駄目だつて言われちゃった。何にもやることない。窓の外を見てもどんよりと曇ってる。しかも、午後からは雨も降っちゃうかもつて。とりあえず、外に出てみようかな。何かないかな、おもしろいこと。

「今日は退屈だにゃ」

思わずそう呟いていた。

♪ ♪ ♪

秋葉原には幾度か来たことがあつたが、じっくりと見るのは今回が初めてかもしれない。いつだったか、小泉や矢澤さんに『スクールアイドルの勉強』と称してUTX学園の屋外モニターの前やアイドルシヨップなんかに来たことはあつたが、こうして色々を見て回るのは初めてだ。電気街の名に恥じず、大通りの店はもちろんのこと、少し

裏路地に入ったところにもいい部品を売っている店があつて、ついつい目移りしてしまう。衝動買いしてしまいたくなる気持ちもあるが、あまり買いすぎても今月が厳しくなってしまう。そんな欲望と理性との狭間で葛藤を続けていると、何時の間にか時間は12時を回ろうとしていた。一度、部品探しは切り上げて昼食にしようか。そう思つて、手に取つて品定めしていた電子部品を戻して店から出る。何を食べようかなーと周辺を見ながら、歩き出す。

空はその灰色を少し濃くしていた。

♪ ♪ ♪

何となく秋葉原に来てみたけど、退屈な気持ちは変わらない。誰かいないかなー、と思つてあつちこつちを見回すけれど、やっぱり誰もいない。歩き回つていたら、段々お腹もすいてきてそれが余計に凜を退屈にさせる。……何だか雨も降りそうだし、仕方ないから、ラーメン食べたからおうちに帰ろつかな。

「せめて、たつくんでもいてくれたらなあ」

思わず口にした言葉に自分でびっくりした。ちがうちがう！凜はただ退屈なだけで、誰かいてくれたら楽しいのになつて思つただけで、そういうことじゃなくて。ぶんぶんぶんと頭を大きく横に振つて忘れようとする。でも、考えないようにすればするほど余計に考えちやう。ホントにちがうの！……でも、なんでこんなに言い訳してるだろう？ちよつぱりそんな不思議が心の中に生まれた。

——だから、今日の前に見えた光景が、凜は一瞬信じられなかったよ。

「たつくん!!」

♪ ♪ ♪

「たつくん!!」

聞いたことがある声で後ろから呼びかけられたので、振り返ると見知ったオレンジ色の髪の少女がこちらに駆け寄ってきた。

「なんでここにいるの?」

「そのセリフ、そのままそっくり返すぜ、ネコ娘」

「また凜のことそう呼ぶ！ ネコ娘じゃないにや！」

「じゃあ、そつちも俺のことたつくんで呼ぶな」

「たつくんはたつくんだにやー」

相変わらざるの平行線で、いつも通りのやり取り。だけど、凜はどこかいつもより嬉しそうだ。

「あれ、小泉は？」

「かよちゃんは今日用事があるらしいにや。……もしかして、会えなくてさびしいのかな？」

「ちげーよ。大抵お前ら一緒だろうが」

いつもテンションが高い凜だが、今日は一段と威勢がいい気がした。遊び相手を見つけてかまってほしいとねだってくるネコみたいだ。じゃあな、と言って元の方向に歩き出すと何故かその隣を凜がついてきた。

「なんでついてくんだよ」

「いいじゃん、いいじゃん。1人より2人の方が楽しいよ」

「エフェクターの部品探しに来てるだけだから、つまんないと思うぞ？」

「いいからいいから」

たぶん何を言ってもついてくるだろうから諦めることにした。と、そもそもこれから昼食を食べようとしていたことを思い出した。

「そーいやネコ娘、昼飯は？」

「ままだよ」

「じゃあ、とりあえずなんか食べるか」

「ラーメンがいいにや！」

予想通りの答えが隣から帰ってくる。別に文句はないのだが、思わず苦笑を返していた。変わらないな。まあ、それでこそその凜なのだろうが。

「お前、いつもそれだな」

「だって、ラーメン美味しいじゃん！」

「別にいいけどな。でも、この辺あんま来たことないから店は任せる」

「任せて！ こつちに美味しいラーメン屋さんがあるから」

「おい、引つ張るなよ」

言うや否や、俺の手を取って駆け出した。女の子らしい柔らかい手に少しドキリとしたが、凜の方はもうラーメン屋さんに向かうことで頭がいっぱいで全然気にしていないようだ。やれやれ、と少し呆れながら俺も合わせて駆け出した。着いたラーメン屋は昼時だということもあり、混んでいたがさほど待つことなく席に着けた。俺は味噌、凜は醤油ラーメンを頼んだ。

「お、上手いな」

「でしよー！ 凜もしよっちゅう食べに来るんだ」

凜とはよく練習の終わりなんかにはラーメンを食べに行くことはあったが、そういう時は大抵小泉や真希なんかと一緒に、2人で食べに行くのは今回が初めてかもしれない。俺の目の前で美味しそうに食べ進めていく姿を見ると、何となく癒される、気がした。

「隙ありだにや」

「あつ、ネコ娘そのチャーシュー返せ！」

前言撤回だ。こちらがラーメンから目を離している一瞬を見逃さず、チャーシューがかつさらわれた。返すように叫んだ時には手遅れで、既に口の中へと運び込まれてしまった後だった。

「大事にとつといたやつを……」

「おいしいにやー！」

あまりにも突然の出来事だったため、怒る暇もなく、ただただシヨックに打ちひしがれていた。恨みを込めた眼差しで向かいの席を睨み付けるが、凜はそんなものどこ吹く風といった様子で、再び自分のラーメンをすすり始める。改めて湧いてきたチャーシューの怒りをぶつけようと思ったが、幸せそうに食べているのを見ると何となく怒ろうとした感情が小さくなっていくように感じた。まあ、今回くらいは大目に見てやるか。

♪ ♪ ♪

食べ終わってお店を出て、たつくんの後をついていく。今日たつくんがここにいるのはエフェクター？ってもののパーツを探しに来たからなんだって。

「ねえねえ」

「何だよ」

「エフェクターってなに？」

そう凜が聞くと、たつくんはいきなり転びそうになる。つまりくよ
うな石なんてどこにもないけど、どうしたんだろ？何か変なこと聞い
ちやったかな？

「つたく、前にも1回教えただろーが」

「あれ？ そうだったかにやー」

てへっ、と舌を出してごまかす。たつくんはため息をついてガシガ
シと頭を掻きながら説明をしてくれた。エレキギターはアンプって
いうスピーカーにつないで音を出すらしいんだけど、そのギターとア
ンプの間につながるのがエフェクターで、これを使うとギターの音色が
いろいろ変わるんだって。たつくんがそのエフェクターの写真をい
くつか見せてくれたけど、小物入れよりちよつと大きめの箱みたい
な感じだった。それにスイッチが何個かくつついていて、踏むとオンオ
フできるってことなんだって。そう言えば、たつくんがギターを弾い
ているのを聞いた時、いきなり音が変わったたりしたのもこれを使った
からなんだね。

「――で、一口にエフェクターって言ってもいろんな種類があるんだ
けど、それは長くなるからパスだな。何となくわかったか？」

「うん！ たつくんがギターを弾いてて、いきなり音が変わるのもこ
れを使ってるからなんでしょ？」

「そういうこと。普通に楽器屋行けば売っているんだが、自作したほ
うが安いし、何より愛着がわく」

「ふーん。じゃあ、作ったことあるの？」

「ああ。いくつか作ってきたが、今でも現役で使っているのは3つか
な」

今度はスマホの画面を見せてくれた。何個かエフェクターが並べ
られていて、これとこれだよって教えてくれた。夕焼けみたいなオレ
ンジ色の箱と白黒のチェック模様の箱がたつくんが作ったものらし
い。

「あれ、もう1個は？」

「……」

「たつくん?」

「あ、ああ。もう1個はとっておきで、普段は使っていないからここには写ってない。ここぞという時にしか使わないんだ」

「へへ」

そう言ったたつくんの顔は一瞬、瞬きしてたら見逃しちゃうくらいの間だけとっても苦しそうな顔をしていた。でも、今はもう普段の強気な顔をしていた。気のせいかな?

「さて、と。ここでちよつと探してみるか」

見るお店を決めたみたいで、たつくんと一緒に入っていく。お店の中は小っちゃい部品がいろんなところに置いてあって、全部同じものに見える。

「あ、ネコ娘。うかつに触んなよ。結構デリケートなやつもあるから」
それだけを言って、棚に並んでいる部品をじーっと見つめ始めた。時々別の棚のところに移動したり、部品を手にとって見比べたりしていた。そんなに見てたら穴が開いちやんじゃない? って思っちゃうくらい。初めて見る顔だった。ギターを弾いている時や、凜たちの練習を見ている時とも違う眼差し。きつと、ほかのみんなは知らない、凜が一番最初に見つけた顔。そう思うと、なんだかちよつとだけ、嬉しくなった。

「よし、じゃあ行くぞ」

「あれ? もういいの?」

「ああ、さつき行った店の方が安いつてことが分かった。だから、そっち行くぞ」

お店の外に出ていくたつくんにおいていかれないように慌ててついて行く。いつにも増して機嫌がよさそうなたつくんは何かの曲を口ずさんでる。

「ねえねえ、それ何の曲。もしかして新曲?」

「んにゃ、最近聞いているバンドの曲。結構ポップな曲調だから、参考になるかと思つてな」

聞いてみ、といつもたつくんが使っている音楽プレイヤーを差し出

してくれた。イヤホンを耳につけて再生ボタンを押ししてみる。ギター
の軽快な音から始まって、歌も入ってくる。とつても楽しそうな
音楽。思わず踊りだしちやいそう。

「いいバンドだろ?」

「うん! 踊りたくなつてきちやうにや!」

曲に合わせてその場でステップを踏みながら歩き出す。時々人に
ぶつかりそうになつちやうけど、上手く避けていく。

「おいおい、危ねえつて。……まあ、いいか」

たつくんが一瞬止めに入つてきそうだったけど、凜に合わせてリズム
を取つてくれた。ちよつとびっくりしたけど、とつても嬉しかった。
同じリズムで進んでいく。よく考えてみたら、これまでなかった
ことかも。そう考えると、鼓動がちよつとだけ速くなつた気がする。
何でかな?

♪ ♪ ♪

「よし、これで十分だろう」

最初に訪れた店で部品を買い込んで、再び通りに出る。少し買いた
ぎた気がしないでもないが、久しぶりに作るからミスすることを考え
れば妥当な量だろう。後は、金属理化学研究部の部室でも貸してもら
おう。

「すつごい重そう。そんなにいっぱい作るの?」

「これで上手くいけば2個くらいかな。久しぶりだから、多分1個で
きりや上出来だな」

「えー!? そんなにあるのに…」

「素人が作るからな。3個に1個は音が出ない」

「へー、難しいんだね」

そんな取り留めのないことを話しながら駅へと歩いていると、なに
やら人が集まっている場所があった。

「あれなんだろう?」

「さあな、行つてみるか」

近づいてみると、どうやらシルバー・アクセサリを路上で販売して
いるようだ。ちよつと探していたところなので立ち止まって見てい

くことにした。

「いらっしやい。……これは、珍しいお客さんだ。今話題のスクールアイドルにめきめきと名を上げているギタリストさんのカップルとは」

「凜を知っているのかにや?」

「もちろん。確かμ'sだったかな? 9人という大人数ながら、1人1人のクオリティも高いグループ。最近注目していたんだよ」

顔を赤くして、照れる凜。俺たちよりも幾つか年上であろう、柔らかな微笑みを浮かべる青年は、俺の方に視線を向けてきた。底知れぬ何かを感じる瞳。まるで見透かされているような、文字通り背景までもが見られているような気さえした。

「君のこともずっと注目しているんだ。バンドだけでなくライブハウス全体を支配してしまうような私の強いギターを弾いたかと思えば、すべての楽器を調和させるアプローチもしてくる、とても面白いギタリスト」

「そんな大したもんじゃないさ」

「この前のライブは凄かったね。1曲どころか1フレーズで一気に客を引き込んだ」

少し前の再結成1発目のライブのことだろう。自分でもいい感触はあったが、それを聴いていた人から言われると、少し嬉しくなった。

「それこそ、俺の力じゃないさ。あいつらのお蔭だよ」

「確か、こちらに来る以前に組んでいたバンドなのだろう? ブランクがあつただろうに、それを感じさせないライブだったよ」

「それはどうも」

直球な褒め言葉に照れくさくなって、思わず素っ気無い返事を返してしまった。視線を外し、並べられているアクセサリに移す。十字架やスリーピースなんかのオーソドックスなデザインのものから様々なモチーフを組み合わせていたり、初めて見る形だったりといった独創的なものまでバリエーション豊かだ。

「これ、全部あんたが作ったのか?」

「二応ね。幾つかは手伝ってもらったものもあるけれど」

「凄いにやー、ことりちゃんにも負けてないかも」

確かにそう思う。衣装とシルバー・アクセサリというベクトルの違いこそあれど、センスや想像性なんて点ではことりさんに匹敵、もしかしたらそれ以上のものを感じた。

「ほんと、普通にアクセサリ・シヨップなんかで売っていてもおかしくないレベルだ」

「いやいや、僕なんてまだまだだよ。どうかな、お気に召すものはあったかい？」

「どれも素敵すぎて選べないくらいだよ」

凜の言うとおりでどれもが良いデザインで選びきれない。とは言え、片っ端から買うほどのお金は残っていなかった。買えるのは2・3点がギリギリだろう。幾つか候補を絞っていると、1つ気になるデザインのものを見つけた。鈴と三日月をかたどったデザインのもの。三日月の腹のところは小さな星が埋め込まれているような形だ。なんとなくだけど、凜がつけたらとても似合いそうな気がした。

「それが気になるのかい？ テーマはネコと星空。自信作の1つだね」

テーマを聞いて、すとん、と不思議の塊が落ちた。確かにこれは凜のイメージだ。見たままのネコっぽさと、時折見せる手に届かない星を見つめるような瞳。それを感じたんだ。

「まあ、俺には合わないだろうけどな。これとこれ、後はそいつを頼む」

「うん、ありがとう。えっと、3200円だね」

ちようどの金額を手渡す。アクセサリは小さな紙袋に入れて渡してくれた。

「それとこれはいつもいい音楽を聞かせてくれるお礼だよ」

そう言つて、先程のネコと星空のアクセサリを別の袋に入れて差し出してきた。無料でもらう訳にはいかないともう一度財布を取り出そうとすると、青年は空いている片手でそれを制した。

「言っただろう？ いい音楽を聞かせてくれるお礼だって。それに、隣の彼女にでもプレゼントしてあげるといい」

「そんなんじやねえよ。ただ……」

「ただ、なんだい？」

凜は俺にとつてどんな存在なのだろう？曲を提供する相手。いや、それだけじゃない。本来出会うはずのなかった、偶然知り合っただけの間柄。そう考えると、心の何処かがチクリと痛む気がした。そうか、じゃあ凜は、

「ただの、大切な友人だ」

彼は一瞬目を丸くして、そして直ぐに何か察したように元通り柔らかな笑みを浮かべた。

「じゃあ尚更、彼女に贈ってあげるといい。足りないなら、これからもいい音楽を聞かせてくれることを期待している証だとも思ってるよ」「分かった、有難くいただきます。：おい、ネコ娘。もうそろそろ行くぞ。んで、どうすんだ？」

「ええー!? もう行くの？ すっごく欲しいけど……今月はお小遣いピンチで」

「それなら、また彼と来ればいいよ。よくこの辺にいるから」

凜はまだ少し納得できていないようで、渋々といった表情で頷いた。それを見届けると、彼はアクセサリを仕舞い始めた。

「さて、もうそろそろ一雨来そうだから今日は店じまいだ。君たちもお気をつけて」

そう俺たちに告げて、名も知らぬ青年は雑踏の中へと消えていった。まるで、けむりが空気中へと拡散して、最初から何処にも存在しなかったかのように。

Ex Phrase: When You Wish
Upon The Star

がたんごどん。電車は進んでいく。

がたんごどん。2人に乗せて。

がたんごどん。電車は揺れる。

がたんごどん。2人の気持ちも一緒に。

がたんごどん。そして、ドアが閉まった。

2人は何処へ行くのか。それを知る者は誰もいない。

♪ ♪ ♪

路上販売をしていた銀細工師の青年が消えた後、2人はどちらからともなく歩み出した。先程と比べるまでもなく、会話はなかった。それは両者ともがこの時間の終わりを感じているからだ。そして、駅に着いた。瞬きのような一瞬。心臓が鼓動を始めてからそれを終えるまでのような長い間。そんな矛盾した感覚を味わった無言の時間を破ったのは、少年の言葉だった。

「じゃあ、また練習で——」

「待って」

しかし、最後まで言い切ることは叶わなかった。傍らの少女が遮る。

「このまま、どこかへ行こうよ」

「どこかって何処だよ」

「どこでもいいよ。凜もたつくんも知らない場所」

「なんだよそりゃ」

「お願い」

少年は呆れた表情で見る。いつもの気紛れじゃなくて、真剣な瞳。今にも涙が零れ落ちてしまいそうな瞳だと。少年は何故かそう感じた。

「わーっつたよ。……とりあえず、電車に乗ってみるか。」

「本当に？ 本当にいいの？」

「いいって言ってるだろ。そんな」

泣きそうな顔で言われたら断れるか。そう言おうとしたが気恥ずかしさが急にやってきて、途中で口をつぐんだ。誤魔化すように、早く行くぞとだけ言って改札へと向かった。それを聞いて、少女は途端に笑顔を浮かべ少年の後を追っていく。

「ねえねえ、たつくんがギターを始めたきっかけって何？」

不規則に揺れる電車の中で、唐突に少女は訊ねた。

「きっかけ？ そうだな、親戚の家に行った時偶然ギターを見つけて、それを借りて弾いていくうちに気が付いたら好きになってた。最初は音楽にはあんまり興味がなかったし」

「そうなの？」

「ああ、いろんな音楽を聴きだしたのも弾き始めてからだな。それからはずっと、どんな時も音楽がそばにあった」

音楽がそばに、と少年の言葉を繰り返す。その意味をあまり理解できていないようだ。それを察して、少年はゆっくりと口を開いた。

「心躍るような気分の時にも、行き場のない感情にむしばまれている時も、全然上達しなくて、ギターを弾きたくなくなった時でさえ、音楽は、素敵な曲は鳴ってた」

「たつくんは本当に音楽が好きなんだね。凜ももちろん好きだけど、たつくんには負けちゃってるよ」

「感情にまで優劣をつける必要はねーと思うけどな。俺もネコ娘も音楽が好き。なら一緒だろ」

「一緒かな？」

「一緒だ」

「そっか……っていうか、いい加減ネコ娘っていうのやめるにやー！」

「そっちだっただつくんと呼ぶのやめろよな」

「たつくんはたつくんだにや」

これまで幾度となく繰り返し、そして今日会った時にもあったやりとり。まったく、なんて眩きながらも少年は笑みを浮かべる。これ以上付かず離れずの関係。それに彼は心地よさを感じていた。少女もまた今の彼との距離感に安心を覚えていた。憎まれ口を叩いても必

ず返してくれる。幼馴染やメンバーとはまた違ったこの関係に。

「もうそろそろ降りてみるか」

少年の提案に満面の笑みで少女は頷く。ドアが開いた途端、彼女は駆け出した。その後を彼はゆっくりとついて行く。アナウンスの後にはドアは閉まり、2人の姿が消えた電車は一層暗さを増した灰色の雲の中へとゆっくり走り出した。

♪ ♪ ♪

2人は人もまばらな道を歩いていく。交差点や分かれ道にぶつかる時、時には少年が、時には少女が方向を決めて進んでいく。先に何があるのか。そんなことを楽しみながら当てもなく前へ進む。

「なあ」

「なに？」

「ネコ娘は何しにアキバに来てたんだ？」

「えっ、凜は何もやることなくって、それで誰かに会いたくなって思ってた……」

急に気恥ずかしさが尻すぼみに小さくなっていく声。少年に届く前に地面へと落ちていってしまう。もちろん彼はなんだって？と聞き返した。

「なんでもない！」

赤くなってしまった顔を誤魔化すように叫んで駆け出した。慌てて追いかける少年だが、抜群の運動神経を誇る少女が全力に近いスピードで走るのには追いつけない。

「おい、待って。1人で勝手に行くな！」

追いつくことが不可能だと悟った少年は立ち止まって、尚も前方を走る彼女に呼びかけた。普段の煙草のせい、少し走っただけでも彼の息は少し上がっていた。呼び止められたことに気付いた彼女は少し離れた位置で立ち止まって、振り向いた。

「まったく、いきなりなんだよ」

「ごめん」

悪いと思っただろ、なんて悪態をつきたくなりながらも、歩いて近づいていく。それを見ていた少女は、何か思いついたようで、

180度方向転換して再び走り出した。

「ほらほら、こつちこつちー!」

「おい、だから止まれって!」

つられて少年も走り出すが、少女は距離が縮まったと思うとスピードを上げるからなかなか追いつくことができない。次第に息も切れなくて、少しばかり禁煙したほうがいいかなんて彼にしてはありえないことを思いついてしまうほどだった。

「たつくん、男の子なのにだらしないにやー」

ようやく立ち止まった少女がそう声をかける。だいぶ息を切らしながらも少年は彼女の隣までやってきた。

「うるせ。こちとら歌って踊るんじゃないで、楽器を弾くのが仕事だ。それに、荷物もあるから重いんだよ」

「言い訳、カツコ悪いにや」

「どうとでも言え」

休むのに近くに会った自販機に寄り掛かる。一方の少女は少し息が上がっているものの、十分に余力があるようにみられる。

「でも、悪くないね」

「何がだよ」

息を整えながら言い返す。数歩歩いてから、向き直って少女は答えた。

「誰かと一緒に走るのが。一人でビューンって走るのも好きだけど、こうして一緒に走ってくれる人がいると、もっと楽しくなったよ」

「そうかい」

俺は走るのそんなに好きじゃない、そんな風に非難してやろうと思っていたが、隣に立った少女の笑みを見るとどことなく憚られてしまった。行き場のなくなった言葉の残滓の代わりに大きく息をついて、自販機から背を離れた。

「もう少し先まで行ってみようよ」

「もう絶対走んないからな」

「分かってるって、ゆっくり歩こう」

そうして歩き出そうとした瞬間、少年の頬に何か冷たいものが当た

る。

「ん？」

「どうしたの？」

「いや、雨が降ってきた、よう、な」

次第に冷たい感触が増えてくる。隣の少女もそれに気づいたようで、そろって空を向く。真っ黒い雲からは確かに水滴が降り落ちてきていた。

「雨だ！ どうしよう、たつくん」

「だいぶ駅から歩いてきたからな、先に進んで雨宿りできるところを探そう」

話している間にも雨粒は落ちてくる数と勢いを盛んにしてくる。慌てて走り出す2人。今度は置いて行つてしまわないように少年にペースを合わせる。次第に強く降り出した雨の中を彼らは転ばないように気を付けながら駆けていく。

雨は降り続ける。植物や道路、そして彼らが無慈悲に濡らしている。しかし、冷たいはずの雨を不思議と2人は心地よく感じていた。走ったことで体が火照っていたのか、それとも濡れているのが1人ではないからなのか。そんな考えすらも洗い流してしまうかのように、ただ雨は降り続けた。



その後数分走り続けすっかり雨に濡れてしまったころ、2人はようやく雨宿りが出来るところを見つけた。まばらに見える民家の中にぽつりと立っている喫茶店。店の中に入ろうとしたが、鍵がかかっていた。休日なのに閉まっているなんてと不思議に思った少年が改めて入口の扉を見ると、ノブのところどころに何か木の板がかけられていた。どうやらこの喫茶店は休日の夜にはバーとして使われるらしく、その分午後は少し早くに一旦閉店して、夜にまたオープンするようだ。今はちようど準備中の時間だった。雨をしのげるだけまし、と自分を納得させる。

「こんなことなら、傘を持ってくるんだった」

「ほんとだよ、へっくしゅん」

「流石にこの時期の雨は冷たい。このままじゃ風邪ひいちまう」

しかし、雨はまだまだ止みそうになかった。もうしばらくの間ここで雨宿りするしかなさそうだった。

「あー！ たつくん、さっき買った部品は大丈夫？」

「大丈夫、乾かしや使えるさ。それに、カバンの中まで雨は入ってないっばいし」

念のためカバンを開けて中身の確認するが、濡れてはいないようだった。パーツはそれぞれ個装されて小袋に入っていたから、よほどのことがない限り濡れることなどない。少年が他の物はどうかを確認していると、ポケットティッシュを見つけた。そしてそれを躊躇わずに少女に差し出す。

「ほら、これで拭いとけ。ちつとはマシだろ」

「え、凜は大丈夫だからたつくんが使って」

「いやいや、お前今度ライブあるって言ってたろ。風邪ひいたら不味いんだから」

「たつくんの方が濡れてるんだから、使った方が良いよ」

「そっちの方が濡れてんだろが」

「たつくんの方が」

「いや、ネコ娘の方が」

むーっ、と互いが唸りながら顔を突き合わせていると、突然扉がガチャリと開いた。顔を出したのは、初老の男性。ずぶ濡れの2人を見つけて慌てて声を掛けた。

「おやおや、2人ともそんなに濡れて。風邪をひいてしまうから早く中に入りなさい」

2人はいきなり出てきた人物に驚きながらも、その言葉に従って店の中へと入っていく。店内は2人掛けの机と4人掛けの机が2つずつとカウンター席が6つ。カウンターの向こうには年季の入ったような器具と時折落ちる稲光を見事に反射する新品のものが混在していた。後ろ手で扉を閉めて、傍らの少女の方を見るとこれ以上濡れる心配がなくなったことへの安堵からか短く息を漏らしていた。

「ほら、これで体を拭きなさい」

この店のマスターらしき人物がカウンター奥の扉からバスタオルを2枚持って出てくる。2人はお礼を言って受け取り、銘々に濡れたところを拭いていく。

「雨に打たれて寒かったろう。何か温かいものでも淹れよう。何がいいかな?」

「俺はコーヒード」

「豆の希望はあるかい?」

「えーと……じゃあ、ブレンドで」

「そちらのお嬢さんは?」

「凜はココア、をお願いします」

少女は普段友人たちと接するときのような口調で言ってしまい、慌てて敬語を付け足す。

「じゃあ、好きな所に座って少し待っていてくれ」

2人にそう告げてゆったりとした足取りでカウンターへと入っていった。そして2人は窓際の2人掛けの席に座る。

「雨、なかなか止まないね」

「通り雨っぽいし、少し待ってりや何とかなるだろ。これから何か予定があるわけでもないし」

粗方拭き終わった少年は、タオルを座っている椅子の背もたれにかけて、窓の方へと目を向ける。真つ黒な雲からは間断なく雨粒が降り注ぎ、遠くのほうでは光が瞬き、数瞬遅れて轟音が伝わってくる。

「にゃっー」

向かいの席に座っている少女が、その音に驚いて思わず声を出す。少年は何故だか少しおかしくなって、少しばかり口元を緩めた。

「ははっ、本当にネコみたいだな」

「今のはちよつとビックリしただけだもん」

そんなことを言われた少女は、恥ずかしくなって髪を拭いていたタオルで顔を隠す。それ以降は光と音の間隔が大きくなり、聞こえてくるのも大分小さいものばかりとなった。

「ごめんね、たつくん」

少女が不意にそう呟いた。

「ん、何がだよ？」

「凜がさつき無理言つてどこか行こうなんて言つたせいでこんなに濡れることになっちゃったから」

「ネコ娘が悪いわけじゃねーだろ。天気なんだから、どうしようもない」

「そんなことない。さつきだつてアクセサリーの人に早く帰つた方が良いつて言われてたし、もう帰ろうとしてたのに無理やり引き留めたし、それにそれに……」

顔を見せずに謝罪を繰り返す少女にため息を漏らす少年。おもむろに手をシヨウジヨの方へと伸ばし、そのまま頭に乗せる。そして頭に乗せたまま手を左右に動かすが、それは撫でるというより揺らす、といった表現の方があつている強さだ。

「え、えっ？ 何？」

困惑する少女を尻目にそのまま手を動かし続ける。抵抗しようとしていた少女も早々に諦めて、おとなしくなすがままとなった。しばらくそれが続いた後、ふとその手が止まった。

「だーから、気にすんなつて言ってるだろ。そもそも、いやだったら最初から来てねーよ。それに濡れたのだから半分くらいは俺のせいだしな」

「たつくんの？」

「考えてもみろよ？ ネコ娘一人なら全力で走れば濡れる前に駅に着けただろうに俺に合わせて走つたせいで濡れる羽目になつたんだろ？」

だからさ、と一拍おいて今度は優しく頭を撫でながら続ける。

「お前はいつもらしく能天気になーニヤーニヤー言つてりゃいいんだよ。そんな調子じゃこつちが狂う」

「う、うん。分かった」

それならよし、とだけ言つて少年は少女の頭から手を放す。彼女は名残惜しそうにあつと言いかけたが、声になることはなかった。そこへ、2つのカップを乗せたトレイを持って喫茶店の主人がやって来た。

「お待たせしたね、珈琲とココアだ。熱いからゆっくり飲んでくれ」
「ありがとうございます」

出来る限り波面が立たないように静かに机の上に置かれる。少女はタオルから顔を出してそっと両手でカップを握り、少年は片手で取っ手を持ち、慎重にカップの中の黒い液体に口を付ける。

「美味しい」

どちらが先に発した言葉だったろうか。雨に打たれたことよって冷えた体に暖かいものを取り入れたことはもちろん、主人の力量がいかに発揮されたものでもあった。

「あつたまるにゃ〜」

「芯まで冷えた体にこれは堪らないな。これで後はタバコが吸えりや最高なん、だ、が…」

何気なく呟いてしまったことに対して、直ぐに少年は失言だったと気付いた。ここにいるのは自分だけではなかったからだ。

「あー！ まだタバコやめてなかったの？ 希ちゃん言ってたよ、いくら言っても止めないって」

「分かった分かった、悪かった。出来るだけ気を付けるよ」

諸手を挙げて降参の意を表すが、追求の声は収まりそうにないことは見て取れた。どうにか話を逸らせないと店内を見回すと、よく見知ったものを見つけた。

「な、なあマスター」

「なんででしょう？」

「あのアコギ、ちよつと弾かせてもらってもいいか？」

「ちよつとー、話逸らさないで——」

言うやいなや少年は席を立ち、アコースティック・ギターのもとに向かう。近づいてみると、大分年代が古いものであることが分かった。少なくとも60年代や70年代のものである。もしかして、弾かずに飾ってあるだけのものかと少し不安がよぎった。

「君はギターを弾くのかい？」

「ええ、バンドとかも組んでて…」

「それなら弾いてやってくれ、最近は弾く人がいなくて持て余し気味

だったんだ」

「言つといてなんですけど、これって大分古いものですよ？　俺なんか弾いても…」

「私が若いときに買った安物だよ。気構えずに弾いてくれ。それに、楽器は飾つていては意味がない。弾いてこそだよ」

「ありがとうございます」

そう言われても、古いものであるのは確かなので慎重に持つて席に戻る。カバンから底の浅い円柱型のピックケースを取り出し、ふたを開ける。普段は細長い三角形のティアドロップ型と呼ばれるものを使うが、今回はおにぎりのように幅が広い三角形のトライアングル型のピックを選んだ。アコースティック・ギターではいつもこちらを使つていた。先端はすり減つており、表面の文字もかすれていて、かろうじてTHINの文字が読み取れるくらいだ。一度解放弦を鳴らしてみると、年代を感じる深く柔らかな響きが鳴った。多少音が外れていたもので、携帯のチューナーアプリを起動し音を合わせていく。概ね揃ったところでできとうにコードを鳴らしていく。少年が持つているものと比べ音にシャープさはないものの、それを補つて余りあるほどの甘い音色。何を弾こうかと脳内のミュージック・リストを参照していく。オリジナルよりかは既存曲の方が良いだろう。そして、最近弾き語りで練習していた曲を思い出した。

終始ハネたりリズムのこの曲はギターだけ、歌だけならそれほど難しい曲ではないのだが、2つを同時にやるとなるとどちらかに引つ張られてしまいやすい曲だ。最近は大分安定した来てから大丈夫だろう、とゆつたりとリズムを取る。

1、2、3、4

観客2人を見てみると、少女の方は聴いたことがある曲だなんて顔で、主人は何処か懐かしむように目を閉じている。

「When the night, has come——」

外の雨は相変わらず激しいが、この室内はゆつたりと時間が流れていく。優しく響き渡るギターの音色と少し唄れた声が丁寧に奏でられている。そして、最後の音が鳴らされる。音が完全に消えた後にパ

チパチとささやかながら確かな賞賛のこもった拍手が鳴る。

「ありがとうございます」

少し冷めてきたコーヒーを飲む。少し危ない部分もあったがどうか聞くに堪える演奏が出来たであろう、と少年は自己分析する。ふと正面を向くと、向かい側の少女は未だ期待するような瞳を向けており、カウンターの向こうからも同様のものを感じた。

「では、僭越ながらもう1曲。次はオリジナルの曲を」

先程とは打って変わって強めに鳴らされる。コード進行だけは外さないようにしながらも即興で弾いていく。オリジナルのもので初期の方に作ったものだからどうすれば外さないかは、ギターを弾く指先が覚えている。最初のサビが終わってからは一転静かになる。雨音をも曲の一部かのような気さえしてくる。そして再び曲調は激しく。ここにはいない誰かに届けと、雨雲よ吹き飛べと訴えかけるように掻き鳴らしていく。その勢いを止めぬままラストへ。1曲目とは違い、短く音を切って終わった。再び少年へと拍手が送られるが、今回は少し遠くからの1人分しか聞こえない。不思議に思つて前を見ると、少女は安らかに寝息をたてていた。

「まったく。まあ、しょうがねえか」

冷たい雨に打たれながら走つて、体力を消耗したところに暖かなものを飲んだから瞼が重くなつても無理はない。少年はギターをもとのスタンドに戻しつつ、主人からブランケットを借りて彼女を起こさないように被せる。そしてカップを持って、カウンターに腰かけた。「とてもいい演奏だったよ、君くらいの年では私はそこまで弾けなかったろう」

「ありがとうございます」

すると、主人は下から小さな箱を取り出す。タバコである。

「君も吸うんだろう？ 遠慮しなくていい」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

一度立ち上がって、カバンからタバコとライターを取り出す。慣れた手つきで、火を灯す。

「私も15・6に吸い始めたのだが、君と違ってただ悪ぶりたかつただ

「けだったよ」

「俺もそう変わりませんよ。ギターを教わってた人の真似をしているだけです」

「いや、吸い方を見ればわかる。ただ大人の猿真似かどうかはね」

少年は息を吐いて、タバコを持つ左手を見る。少しくらいあの人に近づけたのだろうか。様になってきているだろうか。幾ら見てもそれは分からなかった。

「バンドを組んでいるんだったよね？」

「ええ、最近は色々なバンドのサポートとして弾くことが多かったですけど」

「そうか、一見シンプルな音のようだが、その奥にはいろいろなものが見えた」

「貴方もバンドを？」

「少しばかりね。結局夢半ばに挫折して、今ではこんな僻地の喫茶店をやっているがね」

目を細めて、懐かしむようにギターを見る。きつと、あのギターは1番最初に手にしたもののだろう、と少年は感じた。自分なんかよりもずっとずっと色々な経験を音を響かせてきたものだろう、と。

「君はプロを目指しているのかい？」

「いや、ただいい音楽を弾ければそれでいいです。やりたいようにやれば十分なので」

「それはもったいない、君なら上を目指せるだろうに」

「上を目指したところで、それは自分のやりたいものと変わったら意味がない。俺はそう思っています」

じつと、主人が彼の瞳を覗き込む。彼も目を逸らすことはなかった。

「なるほど、君は君なりの音楽を見つけたわけだね」

「まだまだです。今もずっと迷っていて、でも歩き続けている」

「いつか見つかるといいね」

「ありがとうございます」

いつの間にかタバコの火は消えていた。主人が出してくれた灰皿

にそれを捨てるともぞもぞと動く音がした。どうやら、少女が目覚ましつつあるようだ。

「まったく、ようやく起きたか」

少年はそちらへと向かい、呼びかけながら彼女の体を揺らす。まだ寝ぼけ眼ながらも意識は覚醒しているようだ。

「雨もあがったようだよ」

言われて、2人で外を見ると確かに雲が切れていて、合間からは星の光が瞬いている。

「もうそろそろ帰るか、遅くなったら不味いな」

準備しろ、とだけ少女に告げて彼は再びカウンターへと向かった。

飲み物の代金を尋ねるが、訊かれた主人は首を振った。

「お代はいいよ。素敵な曲を聞かせてもらったからね」

「いや、でも俺が勝手にやったことですし……」

「それなら、またここに来て演奏してくれればいい」

これ以上は水掛け論になってしまいうだろうと思ひ、彼はその好意を受け取ることにした。

「またのご来店をお待ちしています」

その言葉を背に受け、2人はゆっくりとドアを閉めた。

♪ ♪ ♪

「すっかり暗くなっちゃったな」

「でもでも、星がとってもキレイだよ!」

言われて、見上げてみると満天の星空が広がっている。周囲には明かりが少ないためか、目を凝らすと普段は見えない星も見えてくる。

「これだけ星がありや、願い事も叶いそうだな」

「届くかな?」

「届くさ、ちゃんと願えばな」

2人は口を閉ざした。時折吹く風が草木を揺らす音だけだ。

「さつきさ、エフェクタの話しただろ?」

「うん」

「実はさ、3つ目てのは師匠に教えてもらいながら作ったやつなんだ」
ぽつりぽつりと語るその声は星空へと吸い込まれていくようだ。

「それで、そいつを使ったライブは必ず上手くいった。ゲン担ぎ、って言うよりもなんていうか、これまでの過去そのものなんだ」

でも、とトーンを落とす。

「最近思ってたんだ。過去に縋ってるだけじゃないのかって。ただただ上手くいつていたって過去を引き延ばしているだけじゃないかって。だから、3つ目はって聞かれたときに答えに詰まったんだ」

「そうなんだ……」

「正直、これからも使っていくと思う。過去は早々切り離せない」

過去は切り離せない。その言葉を少女は心の中で反芻する。自分もそうである自覚があるから、未だに恐怖でいっぱいだから。

「それでも、それでも何時かは進める時が来ると思う。自分一人じゃ無理でも俺には仲間がいるから、アイツらもμ'sの皆も。そして、凜もな」

「え?」

唐突に名前と呼ばれて驚きとともに、恥ずかしくなってしまった。それは少年の方も同じで、目を逸らすかのように上を向く。

「だから、お前も無理せずに頼りやいい。分かったか?」

「うん……でも、ちょっとクサすぎないかにや?」

「うるせ、自覚してるよ」

2人で笑いあう。しかし、直ぐに少年はまじめな顔に戻って言った。

「まあ、とりあえずは星に願いを、ってな。こんだけあるんだ、きつとどれか1つくらいは聞いてくれるさ」

「ほんとに?」

「ああ、きつとな……」

そう告げる少年の横顔は何処か儂く、消えてしまっそうでもあった。少女はそんな少年の手を、ちゃんと存在すんだってことを確かめるようにぎゅっと握った。

「どうした?」

「ううん、ただ……」

どう言えがいいのだろう、少女は少し迷ってから星々に負けないく

「らしい笑みを浮かべてそつと言った。
「ありがとう」

2nd Phrase: Wake For Young Souls

「松波さん、3番の診察室どうぞ」

自分の名前が呼ばれたので、重い体を持ちあげてそちらに向かう。本当なら入学式で校長やらPTAやらの長つたらしい話を聴いている時間だが、これから聴くのは医者の話だ。引越しやら環境の変化やらで風邪を引いてしまったらしい。入学式に行こうとしたところを希さんに止められ、西木野病院というところに来た。流石に、心配だから着いて行くと言うのは止めたが。

「ただの風邪ですけど、少し熱が高いですね。気休め程度ですが、点滴をしていきますか？」

「じゃあ、お願いします」

そう告げると、紙に何かを書き加えて近くのナースを呼んだ。

「こちらどうぞ」

頷いて、後について行く。風邪でする点滴なんて、せいぜいスポーツドリンクを薄めたようなものだったはずだから、効果は期待できない。よっぽど具合が悪そうな顔をしているのだろう。そもそも、あまり風邪は引かない方なのに、と思う。もしかしたら、煙草の量が多くなっていったかもしれない。減らした方がいいだろうか。そんなことを考えていると、別の部屋に着いた。言われた通りに左腕を出すと、手早く血管を探し出され、固定し注射針が刺される。チクツとした痛みが走った。それからすぐさま点滴用の器具が組み立てられていく。

「では、1時間ほどですね。横になって安静にしてください」

言われたとおりに、医療用の少し硬いベッドに横になる。手持無沙汰だったので、こちらに来てからのことを少し振り返ることにした。1人ですべてをこなすことには多少の不安があったものの、やってみると存外大変ではなかった。当たり前だが自分しかないのだからだいぶ融通が聞く。それだから、夜遅くまでギターを弾くこともできた。ここ最近では夜明けに寝て昼過ぎに起きる、そんな生活していた

からリズムが崩れてしまったのかもしれない。加えて、思いのほか気温が低かったのも関係あるだろう。もう少し着込んでおくべきだったか。

そもそも、なんでここに居るんだっけ？バンドを組んでいたはずなのにそこを抜けてまで。あまり親とは良好な関係ではなかった。でも、それが原因ではなかったはずだ。こうして、俺の我儘を許してくれているんだから。

ああ、そうだ。そうだった。バンドを抜けたからだ。自分でメンバーを集めて、そして結成したというのに。それなのに……

「松波さん、起きてください」

呼びかける声に気付いて、目を開ける。どうやら横になってそのまま寝てしまっていたようだ。壁の時計を見ると、ちょうど1時間くらい経過していた。未だ頭がぼんやりとしているが、どうにか体を起こす。

「じゃあ、点滴外しますね」

その言葉に首を振って答える。テープや器具が外されて、小さな注射の後が見えた。すぐにガーゼが貼られ、痕が隠れる。再びナースの後をついて行き、診察室で幾つか医師からの注意事項を聞いてから受付で処方箋を受け取る。そして、近くの薬局で薬を受け取って帰路に着いた。点滴の効果かそれとも少し寝たことによつてか、幾分か体調が回復したように感じた。恐らく後者だろう。とは言え、未だに熱があることは確かだろうからもう少し安静にしているべきだろう。

「あれ、巧実君？」

ふと後ろから声を掛けられる。振り向いてみると希さんだった。学校帰りらしく、制服姿だ。

「こんにちは、希さん。まだ学校の時間なんじゃ？」

「ウチは明日が入学式なんよ。今日は直前の確認だけやったから、もう終わり」

なるほど、と頷く。するといきなり額に手を当てられる。少し冷たい手はひんやりとして心地良かった。

「まだ熱が結構あるみたい。病院には行ってきたん？」

「はい、ちょうどその帰りです」

「無理はあかんよ。ただでさえ病弱少年、って感じなんやから」

「風邪とかには気を付けてたつもりなんですけどね。喉は大事ですし」

「じゃあ尚更タバコは駄目じゃない?」

「まあ、それはそれ、これはこれってことで」

慌ててそっぽを向いて目を逸らすと、やれやれといった風に息を吐かれた。

「全く、まだ未成年なのに。誰から教わったん?」

「えっと……」

茶を濁そうとするが、どうにもそれは許してくれなさそうだ。

「師匠です。俺のギターの。その人の真似ごとですよ」

仕方なく白状した。それと同時にあの人が言っていたことが頭によぎった。

『火をつけたら最初は口の中で吹かすだけ。2回目から吸い込むんだ』

そう教えてくれた。今もずっとその吸い方だ。

「そうなん? てことは、中学生の時からってことやん。もう……」

「まあ、ロクな人じゃありませんでしたから。それに師匠も言っていましたし。『タバコを吸うやつにロクなのはいない』って。……でも」

「でも?」

「でも、とても大切な人です。色々な意味で」

たくさんのことを教わった。くだらないことから、大事なことで。ほんの短い間だったけれど、片時たりとも忘れられない日々だ。

「そっか。でも、当分は吸ったらダメだからね」

「分かってますって。少なくとも風邪が治るまでは」

隣の部屋だから、簡単にバレてしまうだろうし。ただでさえ勘が鋭い人なんだから。でもまあ、偶には禁煙しても罰は当たらないだろう。熱で浮かれた頭でそんなことを考えながら、未だ寒さが剥がれない道を歩いた。



結局、次の日も熱が下がりきらなかったので学校は休み、初登校は入学3日目となった。そもそもクラスが何処かさえ知らないから、先に職員室へ寄って挨拶をすることに。

「え〜と、確か松波だったな」

「はい」

何人かの先生に伝言リレーが行われ、担任に通された。簡単に挨拶をすまして、初日に渡されたプリントや教科書の類を受け取った。

「連絡事項は異常だ。それで、お前の背負ってるのはギターかなんかか?」

「ええ、そうですけど。軽音部とかあれば入ろうかと思っについて」

「ああ、いいか松波。ウチには軽音部はないんだ」

えっ、と思わず声に出して驚いた。ここは生徒数も多いからその分活動も多種多様だ。だから、軽音部もあるものとはかり思っていた。

「……分かりました。でも、別に持つてくる分には問題ありませんよね?」

「ああ、大丈夫だ。管理に気をつけろよ」

もう一度挨拶をして、職員室を出る。軽音部がないことには驚いたが、別に校外で幾らでも活動はできる。今日の夜に連絡を取っていたバンドの人との顔合わせだ。

「おっと」

「あ、ごめんなさい」

職員室を出て、教室に向かおうとしたところで誰かにぶつかかった。慌てて周りを見渡すと女子生徒だったようだ。背はかなり小さく、中学生といっても通じてしまうだろう。同級生だろうか。

「大丈夫?」

手を貸して立たせる。腰まで伸ばした金色の髪はサラサラと流れしており、ところどころ跳ねている。両手で簡単にスカートのほこりを払うと、彼女はじつところちらを見た。正確には、背負っているもののほうに注目されているようだが。

「きみ……」

「おーい、空木。早く来ーい」

彼女が何か話しかけようとしたところで、職員室から顔を出した先生に阻まれる。びくつとまるで小動物みたいに驚きを表した。

「やっべ、じゃあまた会おう少年！」

風のように職員室へ入って行ってしまった。一体何だったのだろうか。ここで突つ立っていても仕方がないので教室に向かう。ほどなくして教室の前に辿り着き、3割ほど空いているドアを完全に開ける。室内ではすでに来ている生徒が何人かのグループになっておしゃべりを楽しんでいた。が、俺が来たとたん視線が一斉にこちらに向く。まあ、いきなり見知らぬ人間が入ってきたら驚きもするだろう。それらを素知らぬフリで先ほど言われていた席に着く。

「おっ、見たことない顔だな」

「今日初めて来たからな」

会話をしていたグループの1つから眼鏡をかけた男子生徒が近づいてきた。

「じゃあ、お前が入学早々休んでたってやつか。俺は桐島樹。よろしくな」

「松波巧実だ。こちらこそ」

差し出された手を握り返す。フランクな人柄のようだ。多少息が詰まりそうであることを予想していたから、話しかけてもらえて助かった。

「それで、巧実はギターやってんのか？ それ、ギターだろ？」

机の横に立てかけてあるモノを指さして聞かれる。肯定の意味を込めて頷く。

「まあ、少しね」

「じゃあ、俺の友人に教えてやってくれよ。そいつさ、中学の時に……」

樹の話によると彼の友人というのが卒業式で好きな人に弾き語りで告白したらしい。しかもビートルズを替え歌で。

「凄えなそいつ。ジョン・レノンに撃たれても文句言えねーぞ」

「それで、そいつ高校で軽音部に入ってリベンジしてやるーって意気込んでんだ。…つと、噂をしたら来たようだ」

言われて教室の入り口に目を向けると、無造作へアでネコ目の男子が入ってくる。こちらへ向かってきて、樹と2，3言何事か話した後こちらに向き直った。

「紹介しよう、こいつがその朝倉小雨だ」

「よろしくな」

「松波巧実だ。……それで樹、ギターを教えるのは別に構わないがそもそも此処に軽音部はないって話だぞ」

「そうそう、それなんだけどさー」

小雨が勢いよく身を乗り出してくるものだから、驚いてのけぞってしまう。なんだかやけに張り切っている。

「昨日バンドのライブがあったんだよー」

「なに、本当か？」

「ああ、金属理化学研究部ってところなんだけど、そのライブがすごくてさ……」

なんだそりや、と疑念を露わにするも小雨は何故か自分の世界に入って滔々と語っている。どことなくキナ臭い話だ。なんでわざわざそんなところが軽音部紛いのことを……

いや、何か事情があるのだろうか。だから、表向きには軽音部であることを隠して活動しているとか——

「それで、今日改めてその部室に行ってみようと思うんだ。巧実も行くぞー！」

「ん？ ……ああ、悪いんだけど今日の放課後はもう予定入れちゃってるんだ。機会を見つけて行ってみるよ」

「そうか。それにしてもドラムのハルさんが——」

ますます昨日休んでしまったことが悔やまれる。とは言え、後悔先に立たず。今は最大限やれることをやるだけだ。まずは、今日会うバンドから。そして、メンバーを見つけ自分のバンドを。机の下で持て余している左手を人知れずぎゅっと握りしめた。

♪ ♪ ♪

高校生になって初めての授業を終えて、ひとまず自室へ帰ってきた。未だ開けられていない段ボール箱が3つほど重ねられているう

ちの一番上から服を取り出す。制服をずっと来ているのがあまり好きではないから私服へ着替える。着替えながら時間を確認すると、まだ待ち合わせの時間まで余裕がある。これなら、疑惑の金属理化学研究部とやらの寄ってくる余裕があったかもしれない。まあいいか、と独り言をつぶやいて持ち物の確認をする。アタツシケース状の箱——エフェクタボードなのだが——をもう一度開ける。オーバードライブにデイレイ、ファズ、ワウ、フランジャー、そしてディストーション。持っていくものは一通り入っていることを点検し、そつとフタを閉める。シールドとピックケースはギターケースの方に入れたから大丈夫。さて、どうしよう。このままもう少し部屋の中に入れてもいいが、外に出て時間をつぶそうか。神田明神あたりで少し弾いてから行くことにしよう。そう決めて、ギターを背負いエフェクタボード片手に部屋を出る。

神田明神のあの長い階段の下に着くと、2人の女の子が駆け下りてきた。と思いきや、再び駆け足で上りだす。とは言え、そのスピードは歩くよりもちよつと早いくらいだ。BPM80あるくらいだろうか。息もかなり絶え絶えだ。何かのトレーニングだろうか。再び降りてくるだろうから、邪魔にならないように端を上っていく。上り終えると、巫女さん衣装の希さんが境内の掃除をしているのが目に入ってくる。

「こんにちは、希さん」

「おや、風邪は治ったん？」

「ええ、どうにか今日からは学校に行けました。ちよつとギターを弾いてもいいですか？」

「ええよ。参拝する人の邪魔にならないようにね」

「分かりました。ありがとうございます」

初めてここに来た時と同じ場所にボードとギターケースを下ろす。ギターとピックを取り出して簡単にチューニング。うん、よさそうだ。とりあえず軽く何曲か流して引いてみよう。

今日もギターは相変わらずいい音を鳴らしてくれて、少し下がり気味だった気分も段々上昇傾向へ。歌詞を口ずさみながら掻き鳴らす。

左手と右手、そして声が独立した人格のようだ。左手は冷静に、精確に弦を抑え、右手は感情のままに上下に動く。そしてその上を声が流れていく。3曲目の曲が終わるとパチパチパチパチ、と速いテンポの拍手がかけられた。

「すごいすごいーいー！」

その声の主は先程階段を走っていた女の子のうちの片方、肩くらいまで伸ばした髪を右側だけテールにして留めている。走り終えたばかりのようでまだ息が整っておらず、頬には汗が伝っていた。

「ちよつと、穂乃果！ いきなり声を掛けてはびっくりするでしょう」
何と言おうか迷っていると、小走りで誰かが走ってきた。黒髪で腰のあたりまでの長髪の女の子と黒髪の子ほどではないが長髪で右側を持ち上げて、前髪の少し上はトサカみたいになっている子。前者は凛とした雰囲気伝わってきて、後者は柔らかくで優しいげだ。

「歌もギターもとっても上手？ ねえねえ、あなた作曲とかできる？」

「えつと、まあ一応出来るけど」

「じゃあじゃあ——」

「穂乃果！ すいませんいきなり声を掛けてしまつて」

一番最初に来た子を黒髪の子がたしなめる。別に、とだけ告げて様子を見ているとどうにか話がまとまったようで、3人が同時に此方を向く。

「ちよつと話を聞いてもらえませんか？」

「30分以内に終わるなら」 携帯で時計を確認してから返答する。

「じゃあ……」

その3人——最初の人が高坂穂乃果、黒髪の人が園田海未、おつとりしたグレーに茶色が混じった髪の人が南ことりと言う名前らしい——が言うには、音ノ木坂学院の廃校をどうにか出来ないか、と言うことで今人気のスクールアイドルをやることになったらしい。しかし、全くの初心者で歌もダンスも衣装もまだないということらしい。「それで俺に曲を作ってほしい、ということですか」

「そうなんだよ。どうかな？」

高坂さんが顔の前で手を合わせながら訊ねてくる。俺は息を少し

長めに吐いてからギターをしまいながら答えた。

「結論から言ってしまうは無理ですね」

「え!? なんぞ?」

「理由は大きく3つ。1つ、確かに俺は作曲できますけどそれはあくまでバンドの曲です。アイドルの曲は作ったことがない。2つ、曲と言ってもギターだけじゃどうしようもない。最低でもピアノかシンセが必要」

フアスナーを閉めて立ち上がり、ギターを背負う。エフェクタボードを持ち上げて再び口を開いた。

「そして3つ、1か月後にライブをやるってことらしいですが、今日から曲を作ってそれを録音して。それから曲を覚えてダンスを考えるでは恐らく間に合わない。中途半端なパフォーマンスになってしまうのはそちらも本意ではないでしょう?」

3人は顔を見合わせる。全員が一樣に渋い表情を浮かべていた。

「というわけで、申し訳ないですが他の人を当たってみてください」
一方的に言いきって立ち去ろうとする。しかしそれは叶わなかった。目の前に希さんが立っていたからだ。

「副会長さん」

高坂さんが不思議そうにそう呟く。じつと俺を見ていた希さんは徐に口を開いた。

「巧実君、どうかこの子たちの力になってくれへん? うちじやどうしても限界があるから。それに、音楽に詳しい君なら手伝えることもあるんじゃない?」

瞳を逸らすことなくそう俺に語る。何を思っただけでそう告げたのか。何故会って間もない俺なのか。その瞳からは分からない。でも、ただ1つ、何かを待ち望んでいるような継ぎのような思いだけは分かった。

「……貴女には借りがあつた。分かりましたよ」

彼女の瞳に安心の色が浮かんだのを見届けてから振り向く。

「という訳で、ダンスのリズムとか歌の練習とかにならアドバイスはできると思います。一応曲もやってみますが、期待しないでどうか別の人を見つけてください」

「本当!？」

「もちろん。でも、俺も自分の活動があるのでその合間にですけど」

「ううん、それでも凄く助かるよ。これからよろしくね巧実くん!」

そう元気に言い放って右手を差し出す。こちらこそとその手を握り返す。女の子の柔らかい手。しかし、そこには彼女の信念を表すようにしっかりと力がこもっている。

「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

「よろしくね、巧実くん」

園田さん、南さんとも続けて握手を交わす。何とも不思議なことになったものだ。でも、面白い経験になることは間違いない。どこか夢のようで他人事のように感じながら俺は歩き出した。